

ある夜のドバイでの語らいからの随想（湾岸諸国の今後）

UAE滞在中のある夜の事。その夜もいつもの週末と同じく、単身赴任のパキスタン人の友人を訪ねていた。その夜は友人宅に彼の古い友人が2人ほど訪ねて来て、聞けば彼らは大学の同窓生同士。卒業後3人は揃って本田技研のパキスタン法人に就職したのだという。3人の内2人は経済専攻で、間もなく銀行に転職し、工学専攻のラシッド氏のみが現在でも、その関連の仕事をしている。その時、氏はドバイに新しい組立工場を作る計画があり、その関連で来ていた。それについての氏の考え方に、湾岸での技術協力の方向性について示唆する所が多かったので紹介する。

UAEは豊富な石油資源を利用し、アルミニウムの生産が多い。そのアルミニウムを用い単車をドバイで生産する。マーケットはパキスタンを中心にその周辺諸国。こうした場合、そこで働く工員は大半がパキスタン人となるだろう。このプロジェクトでUAEは大きな投資をすることなく、加工用アルミニウムを提供し、できた製品の輸出はドバイの十八番である。よってドバイ（UAE）にとっては悪い話ではないと思われる。パキスタンにとっても、パキスタン法人で働くパキスタン労働者を通じ、パキスタンに資本は戻ってくるので、悪い話ではないと思われる。そして治安が良く、この地域の商品流通に精通したドバイに工場を構えることはパキスタン本田にとっても嬉しいことと思われる（恐らく、部品の供給をするであろう日本の本田にとっても）。当事者総てにとって良い話となる可能性がある。

産油国のUAEは安価なエネルギーと原材料を有し、社会・経済は安定し、またインフラの整備は申し分なく、労働力の調達容易で、更には多大な人口を抱えるインド、パキスタン及び中央アジア、アラブ、アフリカ圏に細かな流通網を張り巡らし、ある種の企業にとっては進出先として理想的な条件がそろっていると云える。また将来に国民の雇用不安を抱えるUAEにとっても新たな雇用機会を創出するこうしたプロジェクトは望むところと思われる。

今までの企業の海外での生産拠点の設立は、主に途上国の安い人件費をあてにしているものであった。こうした企業の海外進出は東南アジア、東アジアの国々に見られるような経済発展の一つの原動力となった。その反面、こうした経済発展は、都市部と農村部の経済的格差の拡大、環境破壊等の諸問題をもたらし、ついには最近の経済危機を招いた。UAEが生産拠点となると、労働者を提供するであろう途上国は、オイルにより裏打ちされた湾岸諸国の貨幣を介してマーケットと繋がる事になり、現状より少しは経済的に安定するのではと考えられる。また環境への影響を十分調査する必要があるが、そうした工場進出が可能な敷地に恵まれている。

このように書くと良いことばかりの様であるが、問題点もある。先ず第一に労働者の労働条件である。現在の湾岸の労働条件は組織によりまちまちで、法により定められた基準はあるが、余り守られていないようだ。世界の工業団地たるには労働環境の整備が必要だ。そこで働く労働者も受益者とならなければ意味がない。また湾岸諸国はほぼ全域が極度に乾燥した砂漠地帯で、そのために工業用水の確保も問題となろう。

以上の問題をクリアした上で湾岸諸国が単なるエネルギー供給基地としてのみならず、世界の工業地帯として発展する事はどうだろう。（ドバイにて：阿部）



UAE、アブダビの街並み。石油関連、建設関連、商社等の進出が盛んである。